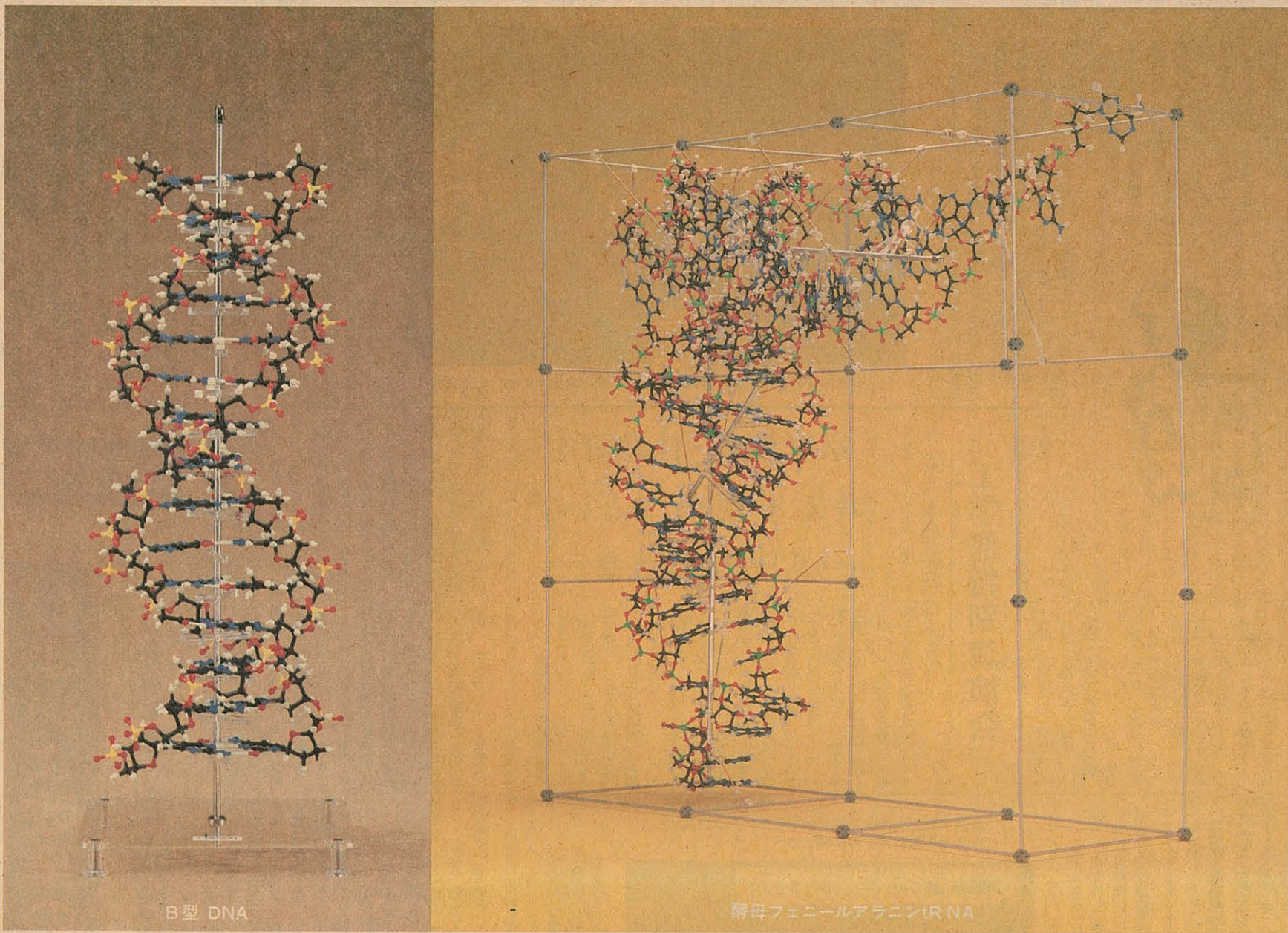


THE
KANSAI
UNIVERSITY
NEWS

第124号

関西大学通信

関西大学広報委員会
大阪府吹田市山手町3丁目



DNAとtRNAの分子模型。DNAは遺伝子の本体であり、ヒトのDNAはこの2億倍程もある。DNAの情報はmRNAに伝えられ、tRNAと協力のもとにDNAの遺伝情報通りのタンパク質がつくられていく（写真提供・丸善株式会社）

遺伝子の詩

徳山 泰

マクロファージ（巨大食細胞）が小さな細菌をばくばく食べている。横からきた別の奴が俺にも呉れと二匹で奪い合いになった。両方から取り合ってとうとう新しくきた奴が分捕って飲み込んだ。ばくばくやっているところに丸いリンパ球が二匹やってきた。マクロファージの外部に聴診器みたいなものを出して電話をかけているようだ。この細菌はどれ位悪い奴か調べているらしい。うんうん、もう少し、よしよかった。早く調べた方が管を切り離して上へあがって行った。もう一匹もまもなくこれは大変だと離れて仲間知らせに行った。大勢の仲間知らせて形質細胞となり、これをやっつける抗体を調合するらしい。

私達の身体はまるで何千何万の蟻の群（白血球）やアミーバー（マクロファージ）のような微小生物からなり立っているように錯覚する。

ビールスに感染すると一番先に防御するのがインターフェロンだ、次いで免疫グロブリンMそれからGの順になる。インターフェロンは三つの型のものがあるが、β型をつくるものと遺伝子（DNA）部分は四百九十八個の塩基対からなる。最近あちこちでインターフェロンの遺伝子組換えによる生産の研究が盛んである。

ヒトはどこからきたのだろう。そして将来はどのような型になるのだろう。あれこれ思い巡らし、町を歩いて将来の美人をみつめるのも楽しいものである。一般に生物種は一種平均二百万年で死滅するという。人間は既にその倍程も続いている。ヒトはたまた一種だけで、また、他の生物と全く違っていてスペースシャトル（宇宙船）にみられるように非常に高度のエネルギーを利用し得る。

宇宙というと、ライアル・ワトソンは地球上では生命の基は生じないという。星と星の空間こそ生命を生む材料に満ちているのだ。私も書物で調べてみた。宇宙で一番多い元素はもちろん水素だがつぎのヘリウムに次いで炭素、酸素と続く。事実、電波望遠鏡でも宇宙空間に多くの有機物の存在が確認されている。また、コンドロイド隕石には多くのアミノ酸が含まれている。彼は、これらの宇宙塵の付着した彗星のチリが地球に注がれ地球の粘土上で生命は進化していったという。現在の遺伝子のような役割を粘土の結晶がしたというのだ。

遺伝子について彼の本、「生命潮流」の中で

「動物の鑑たる人間が一群の化学物質のためのタクシーにすぎないとは……冗談じゃない。だが、その証拠は強力であり明瞭だ。われわれは死ぬが遺伝子は死なない。老いることすらなく、そのかわりにあらゆる世代を通じて体から体へと乗り換えていく。そしてひとつひとつの体を自らの目的のために使う。連絡と続く便利な乗り物は進化という名の高速道路に沿って乗られ腐ってゆくが、そこへ別の遺伝子が乗客としてやってきて交換部品を拾いあげて自らもつとまな遺伝機械となる。

個人に未来はない。われわれははかない存在にすぎない。われわれに運命のカードを配った当の本体であり、われわれが誇りとする染色体にしてみれば消えてゆく。新たなカードが配られるたびに混ぜこぜにされて、忘却の彼方に押しやられる。変わらなないのはカードそのものだけだ。カードとは遺伝子であり、これは永遠だ。

大きく恐れおののきながら、われわれは恐いもの見たさにカードの中味を覗きたい欲望に駆られる。ヒトの「遺伝子バンク」は既に開始されている。三十数億の塩基対からなるヒトの遺伝子を小さく切って何千何万の微生物の中にクローン化されている。それは、何千何万の人によって細かく解析されるだろう。そして……マクロファージや白血球の不思議もやがては解明される日がくるであろう。

（工学部教授）

生と死をめぐる報道が最近多く目についた。そこで感じたのは、特定の専門的な仕事に従事している人、一般の人々とは物事の感じ方に違いがでるのではなかろうかということである▼

子の出生といえは、人間の性繁殖行為によってもたらされると考えられていたが、英国で最初に成功した体外受精の出生に刺激されてか、日本でも、日本受精着床学会が発足し、本格的な臨床応用が始まることになった▼米国の専門雑誌には数年前から論文が掲載され、「試験管ベビー」の法的地位などという論文を日本では無縁なものとして読んだが、日本でも現実のものとなった。ついでに付け加えると、ホストマザーやクローン人間についても記述している。当時クローンという意味が判らなくて難儀したものであるが、最近クローンマウスの成功の記事がでている。医学の進歩に驚かされる▼一方では、親子とは何か、父子関係とは、母子関係とはといった問題を真剣に考えざるを得ない▼臓器移植の技術も非常に進んでいる。移植のための新鮮な臓器の必要もあってか、臓器の問題がクローズアップされている。十一月の日本医事法学会でも「臓器の基準と死の宣告」の討論が行われたと報道されている。臓器の基準については慎重な態度が要求されるであろう。従来のような、瞳孔拡大、脈拍停止、呼吸停止の三大兆候がそろった場合の死の判定では、臓器移植をする医師の側からは不満であった▼生と死の二つの問題をよりとらえてみて、どこか独断的な判断があるように思えてならない。治療行為とは何かを考えてみる必要がある。医療費の高騰を脳死を認める必要性の上位にかける神経においては……

（T・K）

文学部教授

(昭和55年度学生生活調査【文部省】による)

春日淳一

文部大臣、日本育英会理事長へ要望書を提出

昭和五十七年十一月一日発行の「関大信報」第四〇四号では、つとに知らせていた通り、第一は、過日参事長会議で決定した「日本育英会奨学制度変更の動きに関する要望書」を、去る十一月一日、学長の勅命を受けて上京した小川清学長、山崎巖教授、部長代理らより、文部大臣大田実と日本育英会理事長に手提出、あわせて要望書の趣意を説明した。

文部省には、都立大学局学主課課長佐大島清徳氏（面談）、持参した大田宛ての要望書を手渡す同時に、午後（約五〇分）の間、財政事情、課税会の現状などをめぐり互いに意見を交換、つづいて市谷合の日本育英会を訪ね、理事長山松雄氏には要望書を直接手渡し、午三時が三〇分あらず、整談した。聞上り、要望書の趣意説明に加えて、一私注においし、大学教育の奨励等（奨学）を、財上上可能限り、最大限努力を重ねて、無利（食費）の学内奨学制度を維持している現在、文部当局ではなほ、高等教育の奨励等現現のため、特許の配慮を願いたい旨、強調した。（教育学部代理 中島 啓）

[illegible]

鈴木祥蔵

を願つてゐる。もう一、二現
う。大學生が、将来的希望を
りだかねたならば、その果
は、学生君の男が、この
にふな影響を保す
とは必要である。しかし、
とに分ち、重々閑受を招
学生俱あたるべき事であ
この道徳上の害である。雖
に準備するべきである。今
関西大学のみな、わ國の大
立大学は、それれ固有の教
全なら美事のための方途を考
べき時である。

(文学部教授)

小川 悟

[illegible]

教育の機会均等を阻害する状況

[illegible]

